013 奥田 義人

「以身教者従、以言教者訟」

出身地　鳥取県鳥取市
生　年　一八六〇（万延元）年六月十四日
没　年　一九一七（大正六）年八月二十一日

奥田義人（おくだよしと）は、鳥取藩武術師範役奥田鉄蔵・妻房子との間に一女二男に続いて誕生、留三郎と名付けられる。のち、義之助、義人と改名する。

七歳で藩の儒者坂田順蔵の門弟となり、藩校尚徳館に入学した。以後学校の廃止によって仏学校、英学校、鳥取県変則中学校と転学を余儀なくされた。一八七七（明治十）年五月、鳥取県変則中学校から愛知県中学校へ転学、京都府中学校を経て同年九月東京大学予備門第二級に合格、八〇年七月卒業して東京大学法学部へ進学、短期間で転校を重ねたにもかかわらず、成績優秀で授業料はほとんど免除された。大学では奥田の名を一躍全国に知らしめたいわゆる明治十六年事件で一旦は退学を命じられるが間もなく復学、八四年七月卒業、十月に法学士の称号を得る。この時の奥田の卒業論文は東大未曾有の傑作とのことであった。

大学卒業とともに太政官御用掛となり、制度取調局御用掛兼勤となる。以後、特許局長、行政裁判所評定官、内閣官報局長、衆議院書記官長、文部総務長官、法制局長官、内閣恩給局長などを歴任し、法に忠実で職務に誠実な官吏の典型と評された。

一九〇三年には神奈川県横浜市および鳥取県鳥取市から衆議院議員に当選、〇八年宮中顧問官、一二年貴族院議員に任じられた。

一三年には山本権兵衛内閣の文部大臣に就任、司法大臣をも兼任することになる。鳥取出身の初の大臣であった。京都帝国大学の「沢柳事件」の収拾や、教育調査会による教育制度改革への取り組みに努めている。

一五年には東京市長に当選し、「電灯問題（電灯会社間の対立競争）」の解決に努めた。

教育界においては、英吉利法律学校の創設に参画するとともに、東京山林学校幹事兼助教、電信学校法律学教授を嘱託された。〇三年には法学博士の学位を授与されている。

英吉利法律学校では、私犯法や法学通論を主に担当し、のちにはこれに加えて国籍法・親族法・民法などを講義した。東京法学院の幹事を務め、理事としても学校経営に心を砕く。一二年七月の菊池武夫逝去の後をうけて中央大学学長に就任した。文部大臣就任により学長を岡村輝彦に譲るが、彼の死により再任した。

奥田の教育における真髄は「以身教者従、以言教者訟」（みをもっておしえればしたがい、げんをもっておしえればさからう）で、実践躬行（きゅうこう）をもって子弟を感化することにあった。激務の中で『親族法』や『相続法』の改訂を目指し、学校の講師控室のようなところでも講義の合間に寸暇を惜しんで修正の手を入れていたということなどは、その表れであろう。

奥田義人

本学では、一〇年の創立二十五周年と奥田義人の在職二十五年を記念して奥田文庫を創設し、ドイツ刑事法学の長老ビルクマイヤーが蒐集した蔵書を譲り受け、ここに収蔵した。

しかし、一七年六月、失火により校舎や貴重な蔵書を失うという大打撃を受けることになる。その余燼（よじん）くすぶる中、奥田は学長そして東京市長に在任のまま逝去した。

葬儀は八月二十六日、日比谷公園を会場に東京市葬として行われた。会葬者は一万人を超えたというが、葬列が自宅から会場へ向かう途中、本学の前を通過し、関係者の焼香を受けた。焼け跡の板囲いに鯨幕を張りつめ、校門跡に置かれたテーブル上へ大香炉をそなえての焼香は人々の悲しみをより深めたことだろう。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。